

## 編集後記

今号には、3本の論文と1本の資料が収められています。

志保田論文は『資料組織化研究』を継続前誌から全て通して見ることで、整理技術・資料組織論の発展を分析したものです。私としては、この *Journal of I-LISS Japan* と『資料組織化研究』はテーマも目的も読者層もいささか異なるのですが、『資料組織化研究』が果たしてきた役割の一部でも *Journal of I-LISS Japan* で引き継いでいければと考えています。

立花論文は、日本点字図書館が戦後再出発した時期に注目したのですが、困難な時代に図書館の必要性和価値を広めていくというのは、現代の図書館の課題と同じであることにあらためて気付かされます。

大城論文はカナダのオンタリオ州における学校図書館の方針を分析したもので、カナダの学校図書館が必ずしも成功していない部分があることも含めて、同様の問題を抱える日本での適用可能性を検討する材料となります。

前川による資料は、カナダの公共図書館の館長に求められるコンピテンシー(態度や能力)の抄訳です。図書館を管理するだけでなく、地域や図書館委員会などを始めとして、いろいろな関係者とのコミュニケーションが求められるのが特徴です。

「機関誌の運用細則」(p.83)が再び少しですが改定されています。抄録が科学技術振興機構のデータベースに掲載されること、投稿原稿の種類として「資料(reference)」を明示したことがあげられます。

また、今号から裏表紙に英文の目次が入っています。以前よりも各論文には英題や英語のabstractは入っていましたし、外国の多くの読者はインターネットで直接論文にアクセスすると考えられますが、国際誌としての体裁が徐々にですが整ってきたと考えています。

5月に開催予定だったI-LISSと韓国図書館情報学会の共催の大会は10月にオンラインで開催されることになりました。I-LISS Japanからは志保田・藤間・岡田の3会員の発表が予定されています。

(編集次長 岡田大輔)